

永遠の眠りについたあなたへ

原 八千子(兵庫県高砂市・八十四歳)

新婚の時、あなたを『朗さん』と呼んでいましたね。娘が生まれてからは、『おとうさん』と呼び、孫とは『おじいさん』で通っていましたね。しかし、今日は、あなたのことを六十年前の新婚時代の時の『朗さん』と呼ばせてください。あなたと結婚して、いろいろ驚くことが沢山ありました。朗さんの趣味が多くて、私には、それを理解するのが大変だったことです。旅行が好きで、休暇を利用しては、外国へ寝袋を持つての登山等もありました。京都の能面教室に弟子入りして、木彫でいろいろな能面の作品も彫りました。

掛け軸や絵画、壺、徳利等の骨董こっとうの蒐集くっしゅうには、値打ちが分からない私は、苦情を言いって諍いさかいもしました。しかし、今振り返ってみると趣味を通じた友人が多かった朗さんに感化されて、仕事一筋だった私も、人間関係が豊かな人生経験ができたと感謝しています。

美術館へ行く途中、朗さんが駅で突然倒れ救急車で搬送され、脳梗塞で入院した時には元気印を自負するあなたを信じていた私は、驚きと動揺で取り乱してしまいました。右足に麻痺は残りましたが、言語障害が無かったことは嬉しかったです。お医者さんに勧められ

ても、杖に頼らず、何とか自分の足で歩こうとしましたね。若い時から二人で出かけても、手を繋いで歩いた思い出がありませんが、退院後、久し振りに外出をした時、危なっかしいと思うことがあったので、思わず手を出すと、私の手をしっかりと握ってくれましたね。

嬉しかったです！

それをきっかけに、このスタイルで二人三脚ができた私の毎日は楽しくなりましたよ。コロナのせいで、家居いえいの生活が多くなってから、足が弱り、ベッドで寝ていることが多くなりましたね。私が側に行くと、私の顔をじっと見つめ、手を握り離さなくなることが多くなったので、枕元で、朗さんの好きな歌を口ずさむと、歌詞を間違えずに、はっきりと一緒に歌ってくれましたね。

起き上がることも困難になった頃、童謡の『こゝれは寝すぎたし くじった ぴんぴん ぴんぴん ぴんぴん ぴんぴん ぴんぴん』の歌詞を、くり返しくり返し、独りで歌っていましたね。この歌声は、絶対に忘れませんよ。

「このような思い出を作ってくれた朗さんに感謝です。本当に私は幸せな人生でした。

「朗さんー叶うことなら来世も私をよろしくお願いします」